

発電設備専門技術者 インタビュー ③7

富永 寿行 さん（敷島機器株式会社）

札幌駅から東へおよそ2.5km。札幌開拓の中心地であり工業地帯としても発展してきた苗穂地区。昭和23年に創業し、船舶エンジンや発電設備の整備を通じ、北海道の海や陸の産業を支えてきた敷島機器株式会社も、同工業団地の一角に本社を移し、早15年以上が経ちました。

自家用発電設備の試運転やメンテナンスで道内を隈なく駆け回る、同社技術部の若きリーダー富永寿行さん（35歳）に、北の大地で経験された業務に纏わる出来事を率直に語って頂きました。

移動計画も整備作業の立派な一部

富永さんは札幌市の生まれ。地元の工業高校の電気科を卒業後、平成13年に入社。技術課へと配属されました。事務所で席を暖める暇も無く、新人研修を兼ね早速現場作業へ投入されます。入社当時、北海道ではディーゼルコージェネが最盛期であり、富永さんも手や顔を真っ黒にしなが、附属設備や船用機器も含め、整備作業に没頭していったといいます。

広大な業務エリアを任されている同社。作業自体も去ることながら移動も一苦勞。工具や資機材を運

搬するため、移動手段は全て自動車。片道300km、3時間はザラ。氷点下の凍てつく寒さの中、吹雪で高速道路が通行止めになることも多く、その時は一般国道に下りて現地に向かいます。自身も運転中に危険な経験に遭遇したことを回想しつつ、富永さんは北海道での移動行程の重要性を説きます。

「旭川、函館、釧路…等、一斉点検で道内主要都市を回る時は、どういうルートで札幌に戻ってくれば安全かつ効率的かを真っ先に考えます。移動も整備作業の一部と思っています。」

富永さんは日々の業務に勤しむ傍ら、自家用発電設備専門技術者資格を入社6年目の平成19年に取得。同社では社内推奨資格として、現在20名近くの社員が同資格を保有し、スキルアップに繋げているとのこと。

専門技術者による点検整備の重要性

同社は三菱エンジンの北海道総代理店となっている関係で、グループのネットワークを通じてのスポット故障対応もまた多いといいます。町工場・自動車ディーラーなどでは扱えない状態の発電設備が富永さんの処に集まってきます。「当社に至るまでの商流も複雑で、故障原因の究明や結果の説明も、関連会社が多いだけに、正直色々と気を使います」と胸の内を吐露します。

しかし富永さんは、大手メーカー特有の商流の複雑さを、逆にこれまでビジネスチャンスに変えてきました。

「途中様々な会社が介在しているということは、その分お付き合いの範囲が広がるということ。完璧に修理した上で、調整役として故障原因を説明して回り関係先の信用を得ることによって、新たに保守契約を締結したり、その後の更新計画の情報を頂いたりすることもありました」と、“営業マン”と

しての一面も覗かせます。

そのキャリアを着実に積み重ねてこられた富永さんが最も印象に残っている現場の1つ。商業施設の非常用発電設備（ディーゼル機関500kVA×2基）での出来事。昭和50年代に製造された設備でした。

2年ぶりの定期点検を同社にて行ったところ、回転速度は安定しているものの、シリンダ周辺から微かに金属同士がぶつかる打音がしていることを発見。そのためメーカー基準による分解整備を管理会社側へ進言しましたが、検討の末、当面様子見として先送りとなりました。

その翌年、管理会社による試運転において1基に重故障警報が発生したため、再び富永さんらは現地にて緊急点検することに。シリンダヘッドを取り外した処、バルブスティック（バルブがバルブガイドに膠着する現象。カーボンやスラッジ等によって弁機構が作動不良を起こす）により、ピストンがバルブを突いて曲がってしまい、シリンダライナやシリンダヘッドまでが損傷していました。

「過給機まで再使用不能になっていました。我々が打音を確認した時点で整備を実施していれば防ぐことができたかも知れない」と富永さんはその時の状況を顧みます。

富永さんらは、内発協が刊行している「防災用自家発電設備経年劣化調査報告書」の事例を基に、発電設備は経年により確実に劣化することを丁寧に説いた結果、施主側も点検整備の重要性を深く理解。今年の夏、施主の立会いの下、晴れて発電設備専門技術者による実負荷運転を行ったとのこと。

寒冷地対策と共に台風・豪雨対策も

北海道は本州に比べ、これまで台風による被害が比較的少ない地域でありましたが、昨年の台風10号により道内に深い爪痕を残したことは記憶に新しい。富永さんも2年前、平成初期に設置された札幌市内の非常用発電設備のリプレースを担当した後、相次ぐ台風の襲来により、その設備内雨水が浸入し短絡する事態に遭遇しました。パッケージは今回の整備対象外でしたが、道内における仕様選定の教訓となる出来事でした。「寒冷地対策は常に頭の中にあるのですが、今後はパッケージのコーキングなど、台風や豪雨対策も代理店側として率先し講じていきたい」と、同社の今後の在るべき姿も見据え、富永さんは気を引き締めます。

整備技術はきっと愛着の湧く仕事

入社17年目、同社を支える中堅技術者として活躍されている富永さん。先輩方から受けた技術・ノウハウを伝承するため、現在、メーカーの整備解説書を基本に、現場経験のノウハウが詰まった作業要領書を作成しているといいます。「例えばこの部品に塗布する最適な液体ガスケットや、この機械の運搬に必要な人数は何名かなど、整備解説書の更なる詳細基準を作り、チーム内で運用しています」と、作業要領書を片手に富永さんは内容を説明します。要領書には写真や図面も挿入し、電子データにて共有化しているとのこと。

知力に加え体力も要し、時に危険作業にも直面する富永さんの仕事。若年層を中心とした整備業の技術者不足も叫ばれている中、同世代の整備技術者へのメッセージをお聞きました。

「正直楽な職種ではないと思いますね。先に話した通り出張も多いし決して綺麗な仕事でもない。でも続けていくうちきっと愛着の湧く仕事に変わっていくはず。道内での受注競争も激しいけど、人々の生活を支える存在として、互いに切磋琢磨し成長していきたい。」



地元を愛し、これまで道内の多くの発電設備の整備を手掛けてきた富永さん。先達が営々と築き上げてきた市場開拓の歴史。開拓者精神で真摯に突き進みます。